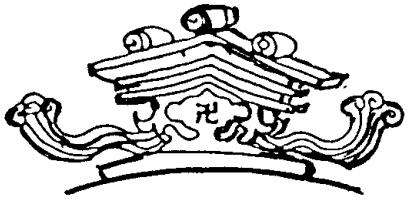
巻之弐

羽黒山をめぐる

後編



羽黒神社 拝殿大棟の鬼瓦

もくじ

造形にみる神仏習合（写真2点）……44

弐　羽黒山点描

〔あ〕本社羽黒神社（写真3点）……45

(1) 祭神と変遷　資料・出羽神社

(2) 羽黒神社社殿　(3) 絵図を読む

〔い〕摂社とその由来（写真4点）……50

(1) 菅原宮と港天神祭り　(2) 和霊宮と蚊張吊らず

補足資料　和霊様　(3) 住吉宮と水谷宮

(4) 熊田神社と熊田恰彰徳碑　参考資料　神社建築考

〔う〕石灯籠二基とその銘（写真4点）……56

住吉宮と水谷宮　珍しい赤鳥居

参　参道のたたずまい

〔あ〕西参道と北参道（写真2点）……59

(1) 西参道　(2) 北参道と石垣

補足資料　羽黒山を撃る

補足資料　羽黒山の古絵図を読む

〔い〕南参道と大森稲荷（写真4点）……62

(1) 南参道　参考資料　信太森と信田妻

(2) 大森稲荷と信太明神　(3) 百度石

造形に見る神仏習合

写真下は拝殿の大屋根、その左上の破風（三角形）の鬼瓦に注目：からすてんぐがにらみをきかす。その外大棟や隅瓦軒先丸瓦などの文様や意匠には祭神とのかかわりや神仏習合のなごりを留め羽黒神社の特色がうかがえる。

写真上は拝殿正面．唐破風の大屋根がどっしりとした向拝が参拝者を迎える．この向拝の天井には十二支を描いた大きな円盤が取りつけてある．
（47ページ写真参照）

▲羽黒大権現の使神―からすてんぐ―
拝殿破風の棟鬼瓦（写真下の左上）

弐 羽黒山頂点描

(あ) 本社 羽黒神社

(1) 祭神と変遷

①祭神とその神徳（左記、羽黒神社由緒縁起参照）

②変遷略記

◆万治元年（一六五八）備中松山城主水谷伊勢守勝隆公が玉島地方の干拓を行うに当り水谷家累代の氏神出羽国羽黒山の出羽神社（現三山神社）の神霊を勧請し移祀、玉島地方開墾成就を祈願し併せて玉島の守護神として祭祀したのが始まりと伝える。

◆寛文五年（一六六五）二代水谷左京亮勝宗公は父の遺志を継ぎ玉島の開発に努力し、併せて社殿を増改築し毎年社領米九石一斗を寄進する

◆元禄五年（一六九二）三代水谷出羽守勝美公が六角石灯籠一対を寄進（倉敷市重要文化財指定）

46・47ページの図と写真参照

◆現在の社殿は江戸時代終りごろ老朽化に伴ない、地元住民の一大勧進で十年の歳月をかけ、嘉永三年（一八五〇）に本殿・安政四年（一八五六）に幣拝殿が再建された。

本殿外側周囲の軒下欄間に細密華麗な七福神の彫刻像が飾られているが、気をつけて見上げる人も少ない。

御祭神

玉依姫命（タマヨリヒメノミコト）

大国主命（オオクニヌシノミコト）

素盞嗚尊（スサノオノミコト）

事代主命（コトシロヌシノミコト）（恵比須神）

御神徳

玉依姫命は「羽黒神社本縁」（鈴木重胤著）によれば、「八坂瓊曲玉より成出させおはしましける由来によること、予日本書紀伝を述して云るが如し・・・云々・・・。亦之名を宗形金凝神と申して世にあらゆる黄金白銀を司どらせ給ふ宗像三所ともに黄金山なるは申すも更なり・・・云々・・・」とあり、海神（わだつみ）であり、交通安全の神であると共に、金銀財宝を掌り、商売繁昌の神であります。

大国主命は国造の神であり、氏子郷土、国家繁栄の守護神であり、特に医薬医業、縁結び、福徳成就の神であります。

事代主命は申す迄もなく、恵比須様であり、昔より恵比須、大国と並び称される商売繁昌、営業隆昌の神様であります。

素盞嗚尊は、国土開発、農業、食物等、衣食住を司る神であり、簸の川上にて、八岐大蛇を退治し、霊剣を得て、国家、皇室の隆昌に尽くされた神様であります。

羽黒神社の御神徳は、以上四柱の神々の広き厚き御恵を私達故郷玉島の地に御与え下さり、私達の交通安全、商売繁昌、家内安全、身体健固の守護神として、永遠に鎮座ましますのであります。

資料 ― 出羽神社 ―

○山形県東田川郡羽黒町・羽黒山上に鎮座

祭神……伊氏波神（出羽国の国魂神）
倉稲魂　玉依姫

○延喜式では小社。修験道羽黒派の本山

崇峻天皇（五八七～五九一）の子蜂子皇子（能除太子）を開祖とし、役行者が中興したという。山名も皇子を導いた三本脚の烏にちなむという。

境内には蜂子皇子の墓もある。

○月山神社・湯殿山神社を合わせた三神合祭殿があり出羽三山神社とも称す。

○平安末期から鎌倉時代にかけて栄え七寺七院住坊四千と号し、守護地頭不入の権を誇った。

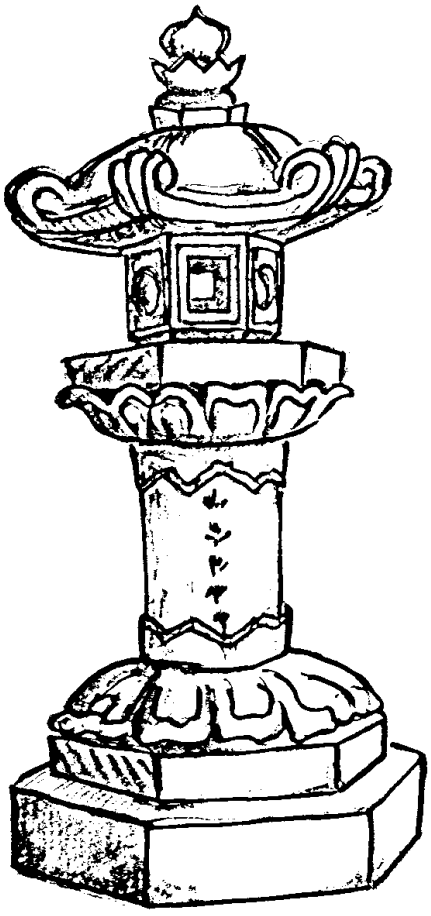
江戸時代には輪王寺宮を管領と仰ぎ、社領千五百石、山上に三二坊と一〇八の堂宇、麓の手向に修験三六〇坊が軒を並べ、関東・東北・甲信越に約五千の配下修験・神職・巫女が居住したという。

＝羽黒鏡＝

出羽神社の前にある俗称鏡ケ池と呼ばれる御手池から発見された鏡をいう。

平安時代から江戸時代までの和式銅鏡で約六百面ほどが知られている。特に平安後期のものは鏡背に花鳥を題材とした文様で優雅な美しさをもち京の貴族たちが自分の姿を朝に夕べに写した鏡を身替りとして修験者にあずけ、この遠隔の出羽三山の霊地の池に投げ入れ祈願したのであろうと推測されているが、厚い信仰をあつめていたことがうかがえる。

資料 ― 六角石灯籠 ―



松山藩主水谷出羽守勝美が元禄五年に寄進したもので、花崗岩製高さ約三メートル簡素にして豪快な作り。本殿の左右両脇に設置、玉垣の内側で見落されやすい。次ページ写真も参照のこと。

写真上　拝殿向拝天井の十二支図方位盤
写真下　水谷勝美寄進の六角石灯籠

つい見過しやすいが、それぞれに意匠をこらした石灯籠がいくつも境内に点在する。気を留めて見たい。

東参道上、社務所脇の屋根型の笠をもつ珍しい石灯籠

(2) 羽黒神社社殿（境内西の駐車場より写す）
左より本殿・中央が幣帛殿・右端が拝殿

ー写真を読むー

本殿の屋根が不釣合いなほど大きく見えるが、いくつか特色が見られる

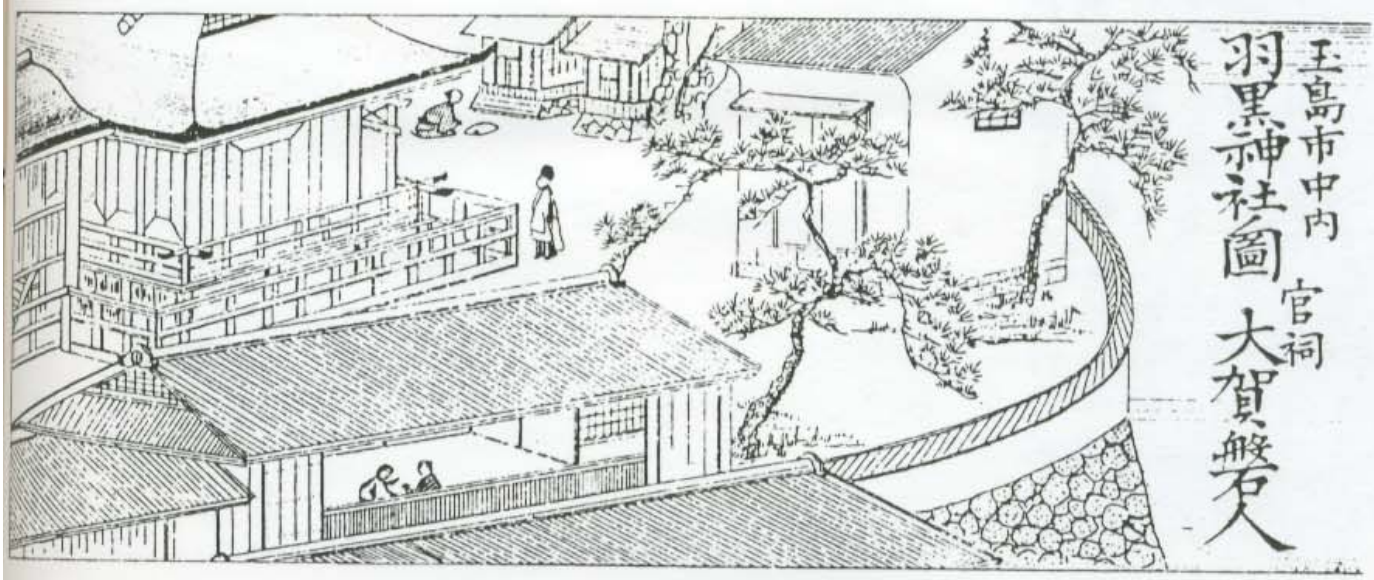
南面する大屋根の中央に小さな破風屋根を設け千木と堅魚木一組を乗せる

大きく流れた大屋根の先端は唐破風造りの庇となって張り出す

大棟の左右の妻は入母屋造りで庇が大きく張り出す。大棟の両端には千木と堅魚木が一組ずつ乗る

高床式の本殿前に幣帛殿（幣帛…ぬさと絹、神前に奉献する物品を供える所）・拝殿へと続く。総じて権現造り様式を基本としたものと考えられる

江戸時代後期建造の郷社と称された社殿には本殿・幣帛殿・拝殿の構成様式が多く見られるのも玉島地方の特色であろうか



玉島市中内 官祠 羽黒神社圖 大賀磐人

(3) 絵図を読む

前ページから続く下の絵は明治中頃のものである。季節はいつであろうか……春四月？……絵の左端の木は満開の桜であろう。花に見とれる人の姿も見える。

陽気にさそわれて参拝者も三々伍々と華やいだ雰囲気がたゞよう。

絵の左端下、正面参道（南参道）を登り切ると正面に拝殿、唐破風屋根の向拝が迎え入れてくれる。よく見ると向拝の土間と拝殿の板敷床とは同じ高さのようであり、拝殿は腰高の板壁で上は吹き抜け、さらに勾欄の廻り縁もなくだいぶ建物の様子が今とは違って見える。

拝殿に続いて幣帛殿その奥にひとまわり大きく描かれた本殿へと連なる。本殿の外周もまた玉垣ではなくて本柵がめぐらされているように見える。

本殿の背後に摂社の小さな社が二つ描かれ、遠方からの参拝者であろうか、すげ笠をかたわらに土下座して拝む人の姿が見えるのも珍らしい。

その右の蔵は今も神庫と称しているものと同じであろう。

蔵の後から手前にかけて築地塀と石垣がめぐっている。築地塀がかくれるところに、開け放された二階座敷と思われる建物では酒を楽しむ人も見え、東参道入口付近にあった小料理屋銀水でもあろうか。

目を絵の左端に転じると、今と同じ場所に絵馬堂があり絵馬を見上げる人、縁台に腰かけて休む人などの姿も見える。　そして左下隅には玉垣と石垣が見え、左上隅では高瀬舟が浮かぶ裏川も見える。

また絵馬堂の右手、松の木陰には摂社の小さい社が三つ見える。これらの摂社は今、本殿の背後や境内東側に移されて駐車場と化した。

◆巻之式 22ページ羽黒山平面配置図 参照

◆摂社の詳細は次ページ以降に記載

【い】 摂社とその由来

羽黒神社社殿の北西寄りに朱塗りの柱が目を引く大きな屋根の拝殿が建つ（写真）

その奥に同じような小さな社が三つ並ぶ（52ページ写真）

向って左から菅原宮、中が住吉宮と水谷宮、右が八幡宮と和霊宮の三社である（巻之式前編22ページ 羽黒山平面配置図・参照）

自動車が前に止っている右端の建物は神庫……絵図を読むの項で48ページの絵の蔵がそうではないかと軽々しく記したが、写真の神庫は新しい建物のように思われる。この神庫の右下一段低いところ（清滝寺境内）に古い蔵があるが、さてもいかがなものか……よくわからない。昭和五十年ごろ境内西側が大改造されて今のような姿に変貌した。

(1) 菅原宮と港天神祭り

江戸時代中頃、玉島港町に美濃部某という寺小屋の師匠がいて『勉学に勤しむ者は菅原道真を文学の神、能筆の聖として祀らねばならぬ』といい、ある夏の夜、道真が太宰府へ流された日を偲んで、沖合いはるかに一舟を漕ぎ出して船中ひそかに祭事を執り行ったと伝えられている。

この事が基となって港の回船問屋を中心にして盛大な港天神祭りに発展したという。菅原宮もこのころ港町の人たちの手により羽黒山に祀られたものと考えられる。47ページの屋根型の笠をもつ石灯籠はこの菅原宮に関連して港町の有力商人が寄進したものではないかと想像している。

明治時代には大阪の天神祭と並んで西日本でも有名な祭りであったといわれている。

天神祭当日は羽黒山周辺の町内は人で埋まり身動きもできない人の波で、海に落ちる人も出る程だったという。

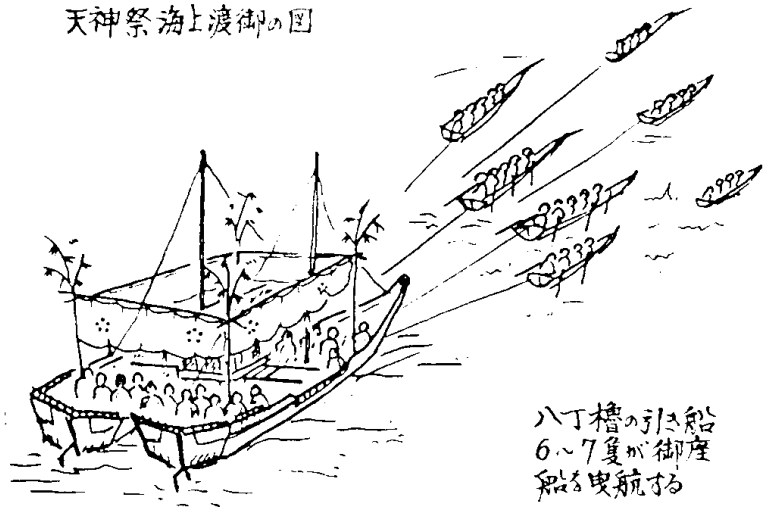
花火が打ち上げられるころ、天神祭神輿の海上渡御が始まる。御座船は帆船二隻を横に並べて神輿を乗せ、注連縄を張りめぐらせ幔幕を張る。赤ふんどし姿の船子が引き船に乗りこんで、掛声も勇ましく漕ぎ出していく。

かつては港内をくまなく三周して返っていたが、いつしか納涼船に乗せて一周するだけとなり、今では神輿を自動車に乗せて陸上渡御と変ってしまった。

戦後の昭和二十年代に復活した「玉島天神祭」の名称も、昭和三十年代後半どろから「玉島港祭」となり、最近では「玉島祭」と変化し、祭の内容も時代の流れと共に大きく変っていった。

〈かつての天神祭のにぎわいの詳細については　玉島むかし　昔物語　九四～九六ページ　天神祭風景　参照〉

天神祭海上渡御の図



八丁櫓の引き船6～7隻が御座船を曳航する

(2) 和霊宮と蚊張吊らず

㋐八幡宮の由来については不詳……強いていえば「神功皇后の真白の珠伝説」―玉島の由来とのかかわりなどが想像されるが……

㋑和霊宮の由来……江戸時代中頃玉島港の繁栄にともなって、玉島へ往来した商人が伊予国宇和島に鎮座する和霊神社から勧請して祀った分社と伝えられている。

㋒蚊張吊らず……かつては毎年旧暦六月二十三日夜『和霊さまが愛する妻子と共に蚊張の中で非業の最期を遂げたこと』を偲んで、ひそかに和霊宮で宵宮祭が行われた。地元玉島ではかつてこの夜は「蚊張を吊らず」に寝るという風習があったといい、また当夜は蚊張を吊らずに夜を明かすと心願一事成就するともいわれていた。

そして明けて翌日は、菅原宮の神幸式・海上渡御が行われる習わしだったと伝えられている。

▲補足資料▼

和霊様（われいさま）―荒魂（あらみたま）に対する和魂（にぎみたま）の意であろうか―

江戸時代初め元和年間（一六一五～二三）四国宇和島藩主伊達秀宗（奥州仙台藩主伊達政宗の子）に仕えた山家公頼（やまべきみより）を祀ったという宇和島和霊神社の祭神。

山家公頼は藩政確立に努める藩主を助け忠勤にはげみ藩政の刷新充実の功績には大きなものがあった。

しかしそのために奸臣大橋右膳らの憎むところとなり、元和六年（一六二〇）六月二十三日の夜半、凶徒の襲撃を受けて妻子ともども蚊帳の中で、非業の最期を遂げることとなった。

ところが公頼を襲った者どもは、翌日ことごとく急死して世を去るという不思議が起った。

写真左奥が菅原宮　中が住吉宮と水谷宮　右手前が八幡宮と和霊宮

不思議はそれだけではなかった。公頼の死後、彼の忠魂が藩主のそばを離れることなく、その神威は佞臣を倒し、また夢幻の間に出現しては災を未然に告げるなど、数々の奇蹟を現わした。

このため藩主秀宗は公頼の忠節を追慕し、小祠を建てて児玉明神と称した。

秀宗の子宗則に至っても神徳日にあらたかとなり崇敬ますますいよいよ篤くなって、遂に京都の神祇官吉田家に請うて神社造営の許を得た。これが宇和島の和霊神社の起源であるという。

和霊神社

(3) 住吉宮と水谷宮

㋐ 住吉宮……三代藩主水谷勝美が元禄二年（一六八九）玉島港の繁栄を願い、また阿賀崎村の鎮守として阿賀崎丸山（現住吉山公園）に勧請し社を造営したのが始まりと伝える。

祭神……表筒男命　中筒男命　底筒男命

（補註）古事記神代記より

伊邪那岐命が愛する妻伊邪那美命を黄泉国へ尋ね、しこめしこめき身を筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原で禊ぎ祓へをした時に成った神……水底にもぐって身を洗い清めた時に底津綿津見神と底筒之男命、水の中程で中津綿津見神と中筒之男命、水の表面で上津綿津見神と上筒之男命。三柱の綿津見神は阿曇連らの祖神、三柱の筒之男命は墨江の三前の大神（住吉大社の祭神）なり。

▲ 後に「息長帯姫命」（神功皇后）が祭神として加えられた

㋑ 水谷宮……水谷伊勢守勝隆・水谷左京亮勝宗・水谷出羽守勝美三代の偉業をたたえ遺徳を敬慕する住民の熱意がみのり、宝暦二年（一七五二）四月、阿賀崎村庄屋菊池太平及び前大庄屋福田喜曽右衛門らが願主となり倉敷代官所に願い出て許可を得、水谷公三代の霊を住吉山に勧請し社を造営したという。

◆ 大正二年合祀勅令に依り住吉宮・水谷宮共に羽黒山に遷祀された。

(4) 熊田神社

▲ 熊田恰公敦徳碑 ▼　碑文に曰く

熊田恰家紋（亀）

備中松山藩老熊田恰公は幕末伏見の変後部下百五十余人を率いて海路玉島に帰着したが反幕府派の備前軍これを包囲し戦雲緊迫人心大いに動揺したよって公は時局の推移を考察し災禍の玉島に及ぶことを憂えかつ部下の助命を乞うて慶応四年一月二十二日柚木邸において自刃したために玉島の地は兵火を免れることができた住民は公の遺徳を敬慕し明治三年熊田神社を奉献して今日に至る

ここに概要を刻して百年余を記念す

昭和四十年四月奉賛会建之

熊田神社

明治維新に際し玉島の地を
兵火より免れしめた
熊田恰公を祀る

（東参道を登り切った右手に鎮座）

熊田恰公彰徳碑

上の写真で鳥居の右柱の茂みの中に
かくれるように碑が据えられている
見落しやすいので要注意

（巻之式 前編22ページ 羽黒山平面配置図参照）

参考資料

‖ 神社建築考 ‖

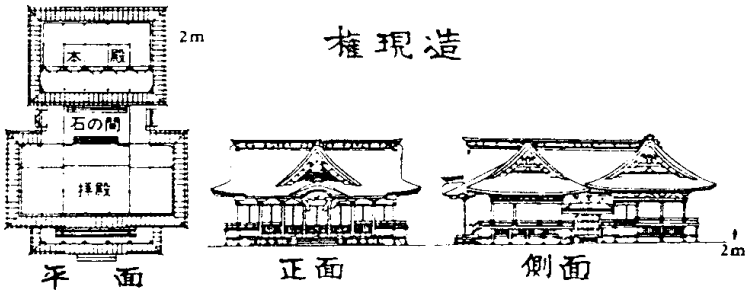
(ア) 神社の中心となる本殿（神殿）の形式には十指に余るものがあり、また規模も大小さまざまであるが、寺院建築とは全く異った一見して神社とわかる様式をもち、幾つかの共通した特色がみられる。

- 切妻造（寺院…入母屋造）
- ひはだ葺屋根に板壁（寺院…瓦葺・土壁）
- 高い板敷き床（寺院…土間床）

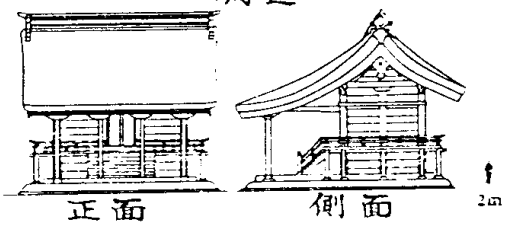
(イ) ① 玉島地方では江戸時代に建てられた郷社と称する規模の小さい神社が多く、また本殿と拝殿が連結した複合社殿が多く見られる。

その多くは江戸時代に発達した権現造（ごんげんづくり）を基本形とした本殿と拝殿を石の間（又は幣帛殿）をはさんで工の字形に連結した様式である。

狭い敷地の有効利用や拝殿で神事など行事が出来る利便性などを考えてのことであろうと思われる。



権現造



流造

② 本殿は大体方一間ほどの大きさで、屋根は両妻を切妻（きりつま）とし正面の屋根が背面よりも軒が長く伸びた流造（ながれづくり）の平入（ひらいり）で、棟に神殿を象徴する千木と堅魚木をのせ、古代の高床式宮殿を思わせる形式が多い。

簡素で小さい本殿に対して、拝殿は大きく造りも手のこんだものが多い。間口五間奥行二～三間（二～三畳敷き程度）。屋根は両妻を入母屋（いりもや）造（づくり）にし、正面は唐破風の向拝を設け、その上の方にはさらに大きな破風を構え、鬼瓦や棟瓦などに意匠をこらしたものも多い。また軒下の木組みや彫刻などにも意匠がこらされて豪華で一際社殿全体を大きく見せている。

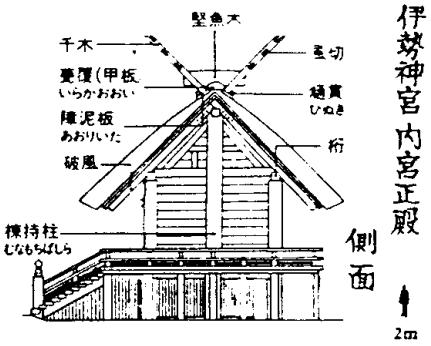
案外我々は拝殿の豪華さに目を奪われて肝心の本殿に気付かないことが多い。

(ウ) 羽黒神社の本殿は豪華で大きく見える。両妻を入母屋造にし、正面の屋根の中央に大きな破風を構え千木と堅魚木をのせ、軒先にも唐破風をつけるなど寺院建築の様式も取り入れられたり、拝殿屋根の瓦には卍字の紋様などが見られ、神仏混淆の色彩が強く見える。

(エ)千木と堅魚木

①千木……棟木や破風板の上端を棟よりも長く突き出したもの

伊勢神宮では破風板を上まで延して千木とし、千木の先端のそぎ方は、内宮正殿では水平、外宮正殿では垂直にしている。



伊勢神宮内宮正殿

◆大棟や屋根葺き材が風でとばされるのを防ぐための重しとしてあげた置千木と呼ばれるものがあり、一般の神社では破風板や棟木とは全く関係なく、飾装用としての置千木が大棟の上に置かれているのが普通。

また山間部の農家ではうまのり、くらかけなどと称し棟仕舞に置千木をのせ、三、五、七など奇数とし数が多いほど社会的地位が高いことを表した。

②堅魚木……古くは古墳時代の豪族の住宅の棟上に横たえて並べた円柱状の装飾部材、形が鰹節に似るところから呼ばれたという。

元来は棟をおさえる役目をもち、棟を固める針目を覆い雨水の浸透を防ぐためのものが、装飾化していつしか天皇など高貴な人物の住いのシンボルとなった。後に神社建築のシンボルとして用いられるようになった。

〈参考〉大嘗宮八本　伊勢神宮内宮十本　外宮九本　住吉大社五本　出雲大社三本など

(う)石灯籠二基とその銘

▲石灯籠の銘を読む「次ページ写真」▼

竿に刻まれた銘　台座の銘(寄進者)

(側面右)文化五年戊辰孟夏建　(側面右)帯屋平兵衛　若狭屋平四郎　船本屋清助　岡本屋嘉助　勇崎屋仙助　西濱屋文兵衛　西野屋平兵衛　中屋豊作

(正面)水谷宮　(正面)住吉濱中買中

(正面)住吉宮　(側面左)住吉屋百蔵　阿蘇屋伊助　元屋久兵衛　油屋郡蔵　五明屋文吉　平井屋小八　澤屋仙右衛門　正屋伊兵衛

(側面左)文化五年戊辰孟夏建　(正面)住吉濱中買中

‖石灯籠二基‖

写真上　水谷宮石灯籠

写真下　住吉宮石灯籠

江戸時代終りの文化五年（一八〇八）二基一対として作られ、阿賀崎村丸山（現住吉山公園）の住吉神社境内に寄進建立されていたものが、大正時代に現在の位置に移されたのであろう。（53ページ参照）

◆石灯籠の竿及台座に刻まれた銘については前ページ参照

住吉宮石灯籠は西参道登り口左に有り、水谷宮石灯籠はさらに少し登った右折した右角羽黒会館玄関脇近くに有る。

‖ 珍しい赤鳥居 ‖

赤鳥居の柱の銘にいう『平成二年十一月吉日・奉納御大典記念　奉献者七二名（氏名略）　製作所富田鉄工所』と。

平成天皇即位御大典を奉祝して氏子総代が寄進建立したのであろう。赤鳥居の由来は不明だが、鳥居の材質が鉄でそのさび止め塗料との関係であろうか……

西参道の赤鳥居（写真上）と西参道のたたづまい（写真下）

参 参道のたたづまい

(あ) 西参道と北参道

(1) 西参道……車社会の現代、自動車に乗ったまゝ赤い鳥居をくぐって坂道を上ると山頂境内へと乗り入れられる。　そのためか石灯籠や玉垣が片側だけに並び、玉垣の配列も変化しているように思う。　（前ページ写真下）

南参道を正面参道と称するのに対して西参道を背面参道、又は東参道を表参道とすれば裏参道ということになろう。

(2) 北参道と石垣……（次ページ写真上）……　江戸時代には清瀧寺の裏手へ上がる通路だったと考えられる。　写真右端白壁に接して腕木門が見え、この門をくぐって写真中央に見える石段を上ることになるが、今では私道と化したのだと思う。

近年民家跡が駐車場となり山の北面の石垣積みが見られるようになった。　古い石垣と新しい石垣が混在する中で二段築造であった様子がうかがえる。　昭和初期ごろまでは悪童連の格好の遊び場……ロッククライミングの場所であったらしい。

‖補足資料‖　羽黒山を攀る

ともあれ、羽黒様は子どもの冒険心を満足させに充分な遊び場所であった。　即ち赤沢電機店横前の石垣を攀登って棚へ上がるのである。　棚は二段あり、最後は玉垣を乗越えて境内に登頂を極めると、クライミングは終了するのである。

初歩の頃は最も距離の短い所、足掛りの容易な所を登り、上達するにつれて遠い所、困難な場所へ移るのである。　一段、二段と登り、玉垣を越えて卒業ということになるのだが、奥儀を極めて免許皆伝を得る者は少なかった。

……中…略……

最も難所とされた北壁へ挑むことは遂にしなかった。　しなかったというよりも、恐しくてできなかったのである。

今も羽黒様へお参りして、境内の西、玉垣に寄って佇めば、吹上げる潮風は老松の梢を揺って颯々と、冒険に明暮れしたゆきし日の回想を甦らせてくれるのである。

（昭和四二年刊行　寳一平著　玉島今昔物語「子供風土記」より抜すい）

写真上　羽黒山北壁の石垣と旧北参道（写真中央の石段）

清滝寺裏手に当り石垣は二段築造で、自動車の前付近では阿弥陀山当時の岩をそのまゝ利用し、周囲を小さな自然石で築いた様子がうかがえる

写真下　南参道石段の中ほど東脇に見られる阿弥陀山当時の大岩の一部

千拓以前の阿弥陀山は海に浮ぶ岩山であったと推測される。石垣用のおびただしい量の石はどこから運びこまれたのか……

補足資料 ‖ 羽黒山の古絵図を読む ‖

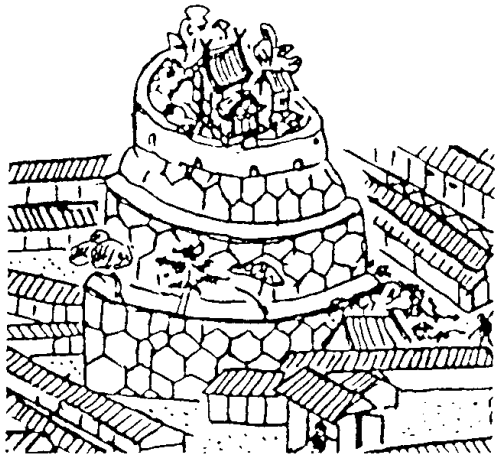
①幕末文政年間（一八一八～二九）に描かれたという絵図によると、羽黒山は三段に築かれた石垣が円を描くように巡り、最上段はさらに築地塀で囲まれた境内となって羽黒神社が鎮座する図となっている。

参道が描かれていないのが残念だが、江戸時代の人たちの羽黒山のイメージを端的に表現したものと考えられる。

羽黒山を象徴する石垣も今では変化が大きい。特に第二次世界大戦時に羽黒山の地下に作られた防空壕の処理が昭和四十年代中頃に実施され、その際羽黒会館が建設されて西面は大きく姿を変えた。

幸にも羽黒山北面で近年民家跡が駐車場となり、石垣積みの古い姿をわずかに偲ぶことが出来る。

②約七〇年後の明治中頃に描かれた絵図では、かなり正確に写実的に表現されているが、石垣三段築造の姿は見られない。



文政の絵図に描かれた羽黒山

明治中期に描かれた羽黒山

かわって東参道付近の石垣が城郭の雰囲気をただよわせ、右側石垣の上の清瀧寺が出城のように見える。

清瀧寺より一段高くなった山頂部の中央に羽黒神社の社殿が見え、周囲の建物配置は43～49ページの羽黒神社ノ図とほゞ同じようである。

一際大きく描かれた南参道がいわゆる正面参道である。参道の両脇に巨岩が大きく描かれているが、現在でも社務所の直下の東側にその片鱗がみられる（60ページの写真参照）。

この図でも西と北の参道が不明だが江戸時代の創建当時以来、四方から羽黒山へ登れるようになっていたという。

かつては羽黒神社の真正面に通じる正面参道として栄えた南参道も人家が密集した今では、その入口が民家にふさがれるように狭い露路の奥となって、他所者にはわかりにくくなった。

それに代って江戸末期から明治にかけて整備されてきた東参道が現代では表参道となった。しかし明治中頃以降は浅口郡役所や玉島町役場への主要通路の役割が大きかったと思われる。

〔巻之式 羽黒山をめぐる 前編 28ページ 参照〕

〔し〕 南参道と大森稲荷

(1) 南参道……写真上…鳥居のところから急な石段の参道を見上げると羽黒神社拝殿向拝の大屋根が真正面に見える。正面参道の呼称由来にピッタリである。鳥居や玉垣も古色蒼然というたたづまいを感じさせる。

写真下……拝殿前から正面参道を見下ろしたものである。中段の「しめ柱」は明治九年建立の新しいものだが、古くは鳥居の始祖形といわれるもの。

1巻之式 羽黒山をめぐる前編31ページ 鳥居考参照1

羽黒山の創設当初は人家もなく、眼前に港が広がり、舟人の声が潮風に乗って聞えてきたのであろうと想像する。

(2) 大森稲荷と信太明神

次ページ写真……謎につゝまれたまゝ……

参考資料

㋐ 信太森（しのだのもり）

和泉なる信太の森の楠の木の
千枝（ちえ）に別れて物をこそ思へ（古今六帖）

「千枝の楠」を中心にした森を信太森といい、大阪府和泉市信太にある。樹下に信太森神社がある。後に楠が葛に転じたという。

㋑ 信田妻（しのだづま）

恋しくは尋ね来て見よ和泉なる
信太の森のうらみ葛の葉

信太森に棲む白狐が命を助けられ、葛の葉という美女に姿を変えて、摂津国安倍野の武士安倍保名と結婚し子を生む。その子は安倍の童子と名付けられた。　或る日、その正体を子に見られた母は歌を残して姿をかくす。　悲しんだ父と子は信太の森に行き母の狐から秘符と名玉とを与えられ、その験力で童子は陰陽師安倍晴明となり、後に術くらべで蘆屋道満を屈服させる。

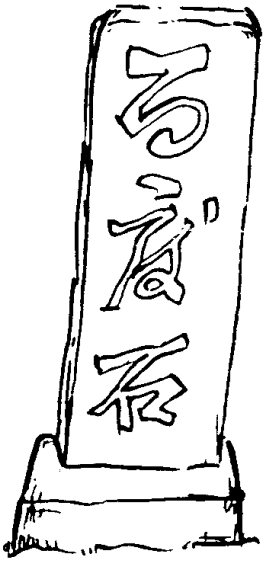
―江戸時代に浄瑠璃・歌舞伎で「信田妻」「安倍晴明出生譚」などとして盛んに上演されたという―

稲荷といえば一般的には京都伏見稲荷をもにして、農村では田の神とその使女（つかめ）の狐として農業神と崇め五穀豊穣を祈り、商家では商売繁昌、招福の商業神として崇拝する稲荷信仰に結びつく。

大森稲荷が農業神・商業神として屋敷内に祀った屋敷神だったのか、陰陽師が崇拝した信太系には何を祈願したのか……羽黒神社も元来は修験道の流れで陰陽道と通じるものがあったが……

(3) 百度石

南参道の大鳥居右柱根元近くに立っている。



刻銘

正面　百度石　　背面　明治十一年寅六月建之
側面右　施主備前児島味野　西原崇治郎
側面左　世話人東瀆仲使中

あとがき

崇敬をあつめた証がせまい羽黒山のいたるところで見られました。「玉垣」については、次回「港町残影」の中で取り上げる予定です。

◆写真上　玉島新田開発の大森治郎兵衛元直の子孫の大森家跡にあったと伝えられているが詳細は不明

羽黒神社南参道登り口の右脇に鎮座

小鳥居の刻銘……右柱表・奉献　干鰯仲買中　左柱表・天保九年戊戌八月吉祥日　世話人　杉屋忠介　西尾屋要蔵　米屋万五郎……鳥居が寄進された天保九年(一八三八)か、それまでに神殿が今のところに遷祀されたと思われるがはっきりしない。

◆写真下　信太明神の碑

碑名　正一位　信太吉松大明神
信太丸大明神

これも由来全く不明だが、信太森に棲む葛の葉狐の伝説とどうかゝわるのか、吉松・丸とは何を意味するのか……わかれば謎も少しは解けそうだが……